

1. むらづくりの主体

- (1) 名 称 ふりがな 大野市矢区 おおのしやく
- (2) 所 在 地 ふりがな 福井県大野市矢 ふくいけんおおのしやく
- (3) 地区の規模 集落
- (4) 組織の性格 地縁的な集団
- (5) 代表者の氏名(敬称略)、役職 ふりがな
 氏 名 : 清水 昌一 しみず しょういち
 役 職 : 区長

2. 地区の概要

総人口	農(林、漁)業 就業人口	総世帯数	総土地面積	耕地	採草放牧地	山林	
35,291 人	2,259 人	10,813 戸	87,230 ha	2,770 ha	1ha	- ha	
農家戸数	販売農家数	専業農家	第Ⅰ種兼業農家	第Ⅱ種兼業農家	主業農家	準主業農家	副業的農家
1,988 戸	1,589 戸	149 戸 (9.4%)	202 戸 (12.7%)	1,238 戸 (77.9%)	166 戸 (10.4%)	720 戸 (45.3%)	703 戸 (44.2%)
地域指定状況			農業地域類型区分				
農振：平成10年度 森林：平成23年 都市計画：無 その他：特定農山村			市 町 村		当 該 地 区		
			山間農業地域		平地農業地域		

※上記データは大野市の数値となっている。

3. むらづくりの内容及び成果

(1) 地域の沿革と概要

大野市は、福井県の東部奥越地方の中心部に位置し、標高150～300mの内陸盆地型気候の農業に適した農山村地域である。矢区を含む9集落からなる乾側地区は、大野市の最西部に位置し、水田約250haの約80%が1区画2～2.5haの大区画圃場に整備されている。また、全集落において水稻の種子生産を行う全国的に有名な種子産地である。

矢区は乾側地区の北部に位置し、稲作が主体の農業集落であり、全戸26戸が農事組合法人アバンセ乾側に参加、集団営農を行っている。

国土地理院承認 平14総農 第149号



福井県

図1 位置図

(2) むらづくりの動機、背景

ア むらづくりを推進するに至った動機、背景

基盤整備以前の矢区は、土壌は湿田で作土が深く、さらに農道の幅が狭く大型機械の導入に支障をきたしていた。また、他産業への就業機会が多いため兼業農家が多く、種子産地の次代を担う後継者、労働力も脆弱な状態にあった。

矢は背後に里山を抱えており、住民の高齢化から里山への人の出入りの減少、集落内の畑の不耕作の増加が進み、荒廃が目立っていた。さらに、近年ではイノシシを中心とした獣害も増えている。

イ むらづくりについての合意形成の過程とその内容

水稻種子生産は個人の自己完結経営が中心であったが、平成元年から始まった大区画圃場整備を契機に、共同施設の設置、広域作業受託組織の設立を経て、旧村を単位とした『農事組合法人アバンセ乾側』（矢区は矢支部として参画）を設立し、個別経営から協業経営の広域営農組織による種子生産の安定化が図られた。

さらに、生産活動が安定したことにより、新たな取り組みとして、矢区では、集落ぐるみの環境保全・美化を通じた交流事業の取り組みが始まった。

ウ 現在に至るまでの経過等

(ア) 旧村を単位とした『農事組合法人アバンセ乾側』の設立、矢支部としての参画

①平成8年

地域として個人で機械を購入しないよう申し合わせるなど、集落を超えた地域全体の営農改善に取り組む。

②平成10年

旧村を単位とした広域作業受託組織『アバンセ乾側』が結成される。

種子生産の集落プール生産方式と種子粃の代表売渡し制度および集団転作(大麦+ソバ)を導入し、種子生産、農地利用の効率が高まる。

③平成12年～現在

旧村を単位とした8集落、136戸、180haが参加し、『農事組合法人アバンセ乾側』が設立され、矢支部として参画する。

プール生産方式、加入全面積の利用権設定および全農地における種子生産体制が整う。旧村単位の経営体が種子生産を基盤とした地域農業の担い手となっている。



写真1 大型機械による耕耘、麦の播種作業

(イ) 集落ぐるみの環境保全・美化を通じた交流事業の取り組み

① 里山や耕作放棄地の整備による桜の植樹、『かたくりの里』の整備

花と緑をテーマとした地域づくりを目指し、区民全員が参加して、荒れていた里山や耕作放棄されていた里山周辺の畑を整備してきた。

まず、平成18年に区内のお寺の周囲に桜を120本植樹した。平成19年には区東部の耕作放棄地の整備と桜の植樹、平成20年には地区を流れる日詰川にさくら堤づくりを開始して堤防に紅華桜を400mにわたり植樹した。

また、里山を整備してきた中で、平成19年に発見したカタクリの群生地の整備と保護に取り組み、『かたくりの里』として群生地を一般に公開するとともに、毎年、里の拡張と遊歩道の整備を進めている。また、平成22年には市道沿いやお寺の周囲にアジサイを植栽し、一年中花の楽しめる『矢ばなの里』づくりを進めている。

現在は、カタクリ3ha 100万本、さくら5品種400本、アジサイ1000本が植栽され、区を上げての保全活動を展開している。



写真2 荒れた森を整備



写真3 開花最盛期のカタクリ園

(3) むらづくりの推進体制

ア 当該集団等の組織体制、構成員の状況

農業生産において、農事組合法人の中では区ごとに支部を置いて作業の調整にあっている。また、水稻種子については乾側地区で採種協議会を設置して、生産から出荷までを行っている。

図2 農事組合法人アバンセ乾側および採種協議会の組織体制

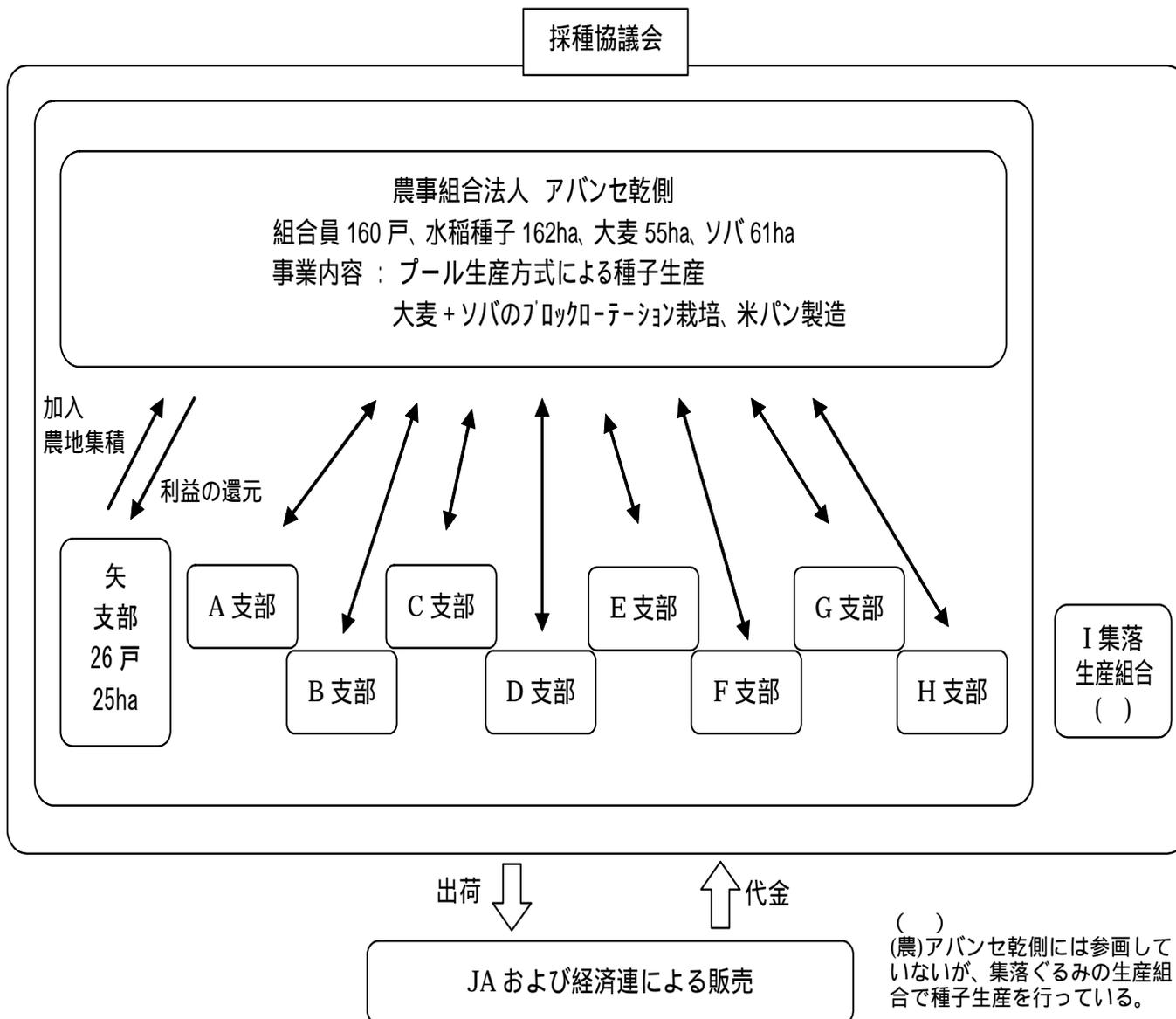
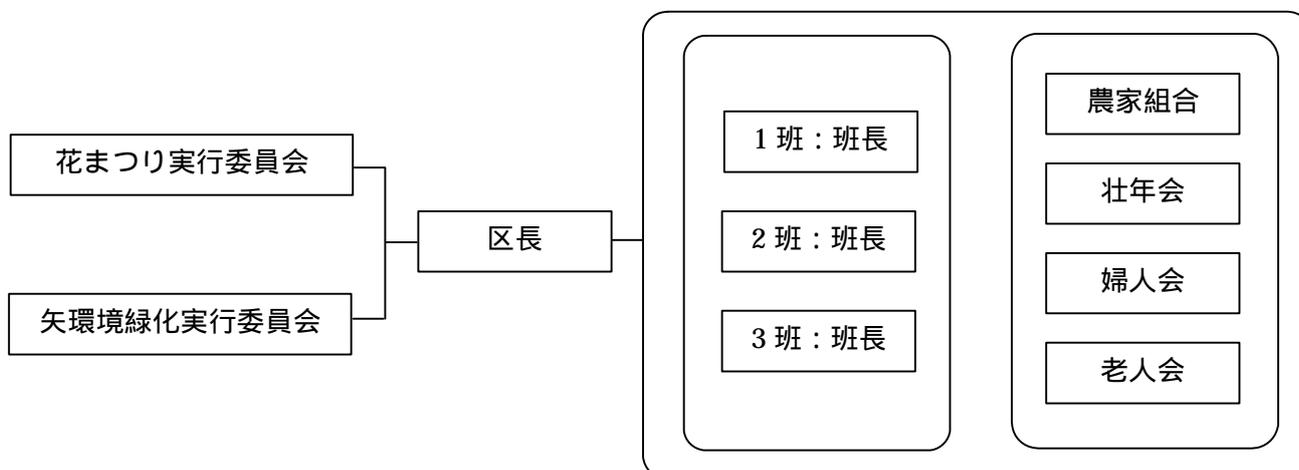


図3 矢区の組織体制



集落内を3班体制に区分して、農作業の出役を調整している。また、班以外に農家組合、壮年会、婦人会、老人会の活動がある。

当初は壮年会の活動の一環として里山整備が始められたが、規模が大きくなってきたことから「矢環境緑化実行委員会」を設置して、より計画的な活動に当たっている。さらに、イベント活動については「花まつり実行委員会」を設置して、花まつりの内容の見直しや改善、PR活動を行っている。

イ 当該集団等と連携してむらづくりを行う他の組織、団体及び行政との関係

水稻種子栽培を主とする農事組合法人アバンセ乾側としての取り組みは、農林総合事務所、JA等の関係機関と連携しながら種子生産事業を実施している。環境美化、里山の整備についての取り組みは、国土緑化推進機構、福井県緑化推進委員会、大野市の集落活性化事業などを活用するなど、県、市、関連団体の協力を得ながら取り組んでいる。

ウ むらづくりに関して、各集落の住民の当該集団等や連携する他の組織、団体との関係及び参加状況等

里山の整備を中心とした環境美化活動は、緑化実行委員会を中心に地域住民のボランティア活動によって行われている。強制ではないが、毎回全戸の半数以上が参加するため、下草刈りや雑木の伐採、整地など比較的大がかりな作業にも取り組んでいる。

(4) むらづくりの農林漁業生産面への寄与状況

ア 当該集団等の農林漁業生産、流通面の取り組み状況

水稻生産はほとんどの量が種子として流通するほか、一部は米パンの原料にも利用され、市内のスーパー等で販売されている。

水稻種子生産が経営の大部分を占めており、早生・中生・晩生品種の9品種を栽培することで作業時期を分散し、機械や人を効率的に配置し大面積をこなしている。

イ 当該集団等による生産力の向上、生産の組織化、生産・流通基盤の整備等への寄与状況

法人組織による大型機械の導入や効率的な作業計画により、労働時間は大きく減少している。また、オペレーターや補助員としての出役による作業労賃を含め、矢支部組合員は10a当たり約95,000円と高い収益を上げている。

収益の内訳 地代 25,000円、管理料 60,000円、労賃 約10,000円

ウ 当該集団の活動による構成員等の経営の改善、後継者の育成・確保、女性の経営参画の促進状況

(ア) 個別経営から地域営農組織の設立により経営が効率化

水稻種子や転作作物の栽培が法人組織を中心に行われることで、個々の労働時間や施設等の整備負担の減少と地域の営農活動の安定につながった。水稻種子栽培においては、雑草や突然変異などの異株の抜き取りが他の水稻栽培より厳しく求められている。法人組織が機械作業や防除作業を大型機械で計画的に行うことで、個々人は各自の細かな圃場管理に徹している。

集落の寺の庭が荒れてきたので整備して桜を植樹しよう、という意見が出たのは壮年会の常会の中であった。実際に行動に移すことができたのは、農作業全般の負担が減

少ししたことによって生まれた時間や心のゆとりが大きな要因である。

(イ) 次代を担うオペレーターの育成（後継者の育成・確保）

現在は50才代の農業者10名が農事組合法人アバンセ乾側の大型機械オペレーターとして参画している。大型機械の操作、整備など機械管理講習会を受講し、技術の向上に努めている。

(5) むらづくりの生活・環境整備面への寄与状況

ア 当該集団等の生活・環境整備面の取り組み状況

イノシシ対策として集落を囲む山ぎわの電気柵設置は住民全員で行っている。また、乾側地区では畦畔にシバザクラの植栽を進めている。水稻種子生産の中で厳しい栽培管理が求められる中、シバザクラで雑草を抑制し畦畔管理負担を軽減するとともに、春には「花のジュータン」として多くの人々の目を楽しませている。

イ 当該集団等による生活条件の改善・整備、コミュニティ活動の強化、都市住民との交流等への寄与状況

(ア) 『かたくりまつり』の開催

サクラによる里山整備を皮切りに、カタクリの群生地を発見したことから平成20年には『第1回春の花まつり』を開催し、花による地域の活性化を形に表した。平成22年からは『かたくりまつり』と名称を変更し、平成24年には花まつりから通して第4回の『かたくりまつり』を迎える。平成23年の『かたくりまつり』は東日本大震災の余波による自粛ムード、天候不順での開催であったが、前年を約15%上回る、16,300名あまりの来場者で賑わった。

ただ花を見てもらうだけでなく、集落の活性化にも繋がるようにするため、イベント開催に合わせて手打ちソバや山菜天ぷらといった総菜の販売も行っている。集落を中心に運営しているため週末のみの開店だが、食事スペースはちょうどよい休憩所ともなっており、お客さんとの会話を楽しむなど、ソバや総菜の販売を通じての地域外の方々との交流が少しずつ始まっている。



写真4 かたくりまつり



写真5 ソバ、総菜などの販売

(イ) 年中楽しめる矢ばなの里づくり

平成18年にサクラの植樹が提案されたとき、「桜で名所、桜で特産」を目指して、景観としてだけでなく切り花としても扱える啓翁桜を選定し、10年後のサクラによる花まつりを思い描いていた。思いがけずカタクリの群生地を発見したことから、10年と待たずに花まつりの開催が前倒しとなり、多くの人が訪れる早春の名所となりつつある。

カタクリやサクラの後に楽しめるようにと植樹したアジサイは、初夏から秋にかけ

て長い期間楽しめる品種である。また、大野市は県内でも有数のソバ産地であり、秋には一面の白いソバの花を見ることができる。これに加えて、平成22年には赤ソバの栽培を始め、花が咲く10月には『赤そばまつり』を開催、従来の白と赤い花が楽しむことができる。

里山環境の整備が進む中、集落内では耕作者の高齢化による遊休地や耕作放棄地が目立つようになってきた。これらの解消として、平成22年初春に『かたくりまつり』会場周辺の遊休地化した畑にジャガイモを植え付け、7月には掘り取り体験を行った。遊休地・放棄地と化していた畑は小石混じりとなっており、これを踏まえて「恋し（こいし）畑」と名付け、少しずつであるが年々面積を拡大している。



写真6 赤ソバ畑



写真7 ジャがいも収穫体験

(ウ) 続けていくための仕組みづくり

里山整備は集落の取り組みとしてスタートしており、山の下草刈りや雑木の伐採作業は強制せずとも平成18年の初年度には集落内のほぼ全員が参加し、現在でも半数を下回ることは無い。サクラの植樹については、集落外からボランティアを募集しており、集落の取り組みの宣伝にもなっている。1回目にはおよそ100人の参加者があり、集落の婦人会から郷土料理ののっぺい汁がふるまわれるなど、盛況であった。

『かたくりまつり』では来場者の声を反映し、一人当たり200円の入場料を取ることにした。集落では地元の山を公開するだけ、という意識があったが予想を上回る来場者の数からカタクリの価値が認識されたことと、来場者からお金を取る価値がある、お金を取るべきだ、という声が上がったためである。入場料は別に設置した募金箱の募金と一緒に、環境整備協力金として、遊歩道や里山の整備に関わる費用に活用している。

ウ 当該集団等の活動による地域への定住促進、女性の社会参画の促進状況等

『かたくりまつり』や『赤そばまつり』といったイベントの物販テントは婦会を中心とした女性たちによって営まれている。集落内では昔から、男性は田・女性は畑、と役割分担されており、現在の里山整備やイベント開催においてもそれぞれの内容に応じて男性・女性の役割を分担し活動を推進している。